明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

堺枯川編輯

家庭雜誌

第四號

明治三十六年七月二日發行

堺不　彥の紀念……一
三つ子の感化力……一
子なき人に與ふる書に就て……一三
隅田川邊の好家庭に就て……一九
不二彥（肖像）……一六
柿山伏（狂言）……一七
猿とクヅ鹿（滑稽畫）……一七
偶感……一八
　馬鹿な男　乞食仝樣　ミエ好みの罪　少年の美、老年の美　妻妾に驕る　教科書事件　家の爲、金の爲、愛の爲
讀者の顧問……二〇
　身体薄弱なる者の結婚の可否　舊信仰と新思想との衝突
樂しき生活……二四
　郡長の一家族（木下尙村）
加藤邸晩餐會の記……二六
倫敦雜話（一）（停愛氏）……二八
家庭文庫……三〇
　我子秀雄、食道樂、應用理科家政心得草、女子の王國、娯節用、狂言全集、
匆々一筆……三二

由分社

東京市京橋區新港町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●本社取次書籍目録

▲我家の犬猫（堺枯川記）是れは動物虐待防止會叢書の第一篇て、枯川が幼き頃より今日まで相親んだ犬猫の事を書きしるした者。書入にて、可愛らしく、美くしき本。（定價八錢、郵税二錢）

▲家庭の新風味（堺枯川著）全六冊定價一圓。郵税八錢。本誌の讀者諸君に對しては、特に本社の志しとして、奇麗なる赤き表紙の合本として差しあげます。

▲第一冊　家庭の組織　▲第二冊　家庭の事務
▲第三冊　家庭の文學　▲第四冊　家庭の親愛
▲第五冊　家庭の和樂　▲第六冊　家庭の教育

▲家庭夜話（堺枯川編輯）全三冊定價一圓、郵税十錢。各冊卅五錢。郵税四錢。

▲第一冊　子孫繁昌話（堺枯川譯述）
▲第二冊　質素儉約の話（加藤眠柳譯述）
▲第三冊　仁慈博愛の話（志津野又郎譯述）

▲枯川隨筆　家庭文學第一篇　定價廿五錢。郵税二錢。

▲言文一致普通文（堺枯川著）定價廿五錢。郵税二錢。

本社に於て取次販賣を爲す書籍は、本誌の讀者諸君に限りて特に**定價の一割引**にて御求に應ずる事と致します。但（我家の犬猫の外）郵券代用謝絕。

▲定價　一冊六錢、半年分卅二錢、一年分六十錢。
▲郵税　總べて當方持の事。
▲注文　總べて前金の事。
▲郵券にて御送金の場合は總べて一割增の事。
▲前金の切れたる時は帶封を朱書にして御注意致すべきに依り直ちに次の前金御拂込を乞ふ。
▲廣告料　一頁五圓、半頁三圓、特別の場所を指定せらるゝ場合は特別の御相談を致す。

發行所（移轉）　東京市京橋區新港町一丁目十七番地　由分社

大賣捌所
東京神田表神保町　上田屋
東京神田裏神保町　東京堂
東京京橋鎗屋町　良明堂
東京銀座四丁目　東海堂
東京京橋鎗屋町　北隆館

印刷所　東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

明治三十六年六月廿九日印刷
明治三十六年七月二日發行

發行兼編輯人　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七百三十八番地　堺利彥
印刷人　東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目十二番地　森潤二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第四號

堺不二彦の紀念

予は本號を以つて三歳にして亡せたる予の子不二彦の紀念と爲す。讀者諸君。予が諸君の前に敢て彼れの肖像を寫すの無禮を許したまへ。

堺利彦

(肖像は第十六頁にあります)

三子の感化力(よみきり小説)

(一)天、我れに辛からば辛かれ

坂本覺馬は富士の麓なる舊き友人の家を訪んとて、午前六時の一番滊車に乘込んで、今新橋停車場を出發した。

覺馬は五年前に飄然として米國に赴き、それより遍く歐洲諸國を回りて、再び日本の土を踏んだのは、やうやく二個月前の事であつた。二個月前東京に歸つて來て、兼ねて計劃の事もあるし、直ちに多くの新知舊知と往來して、殆んど應接に暇なく日夜を過ごしたが、其計劃もやゝ端緒に付きかけたし、餘りに躰の疲勞を覺えたので、せめて二三日間都會を去りて、靜かに保養を試みる事となつた。それにはドコが善からうかと考へる迄もなく、五年前相別れてより殆んど一日も忘れた事の無い親友、今度も東京に着いて誰よりも先づ第一に此人に會ひたいと思うて居た八木郁彦が、如何なる事情か善くは分らねど、富士の麓に退隱して居ると知つたので、さしづめソコを尋ねる事になつた。勿論、疾くに歸朝の知らせも仕てあるし、今日の一番で行くと云ふ電報も打つてある。

覺馬は五年ぶり故國に歸つて、此二個月間、昔を思ひだす事も隨分に多かつたが、將來に對する大いなる計劃を抱いて居るが爲に、身も心も只それが爲に忙殺せられて、欲しいまゝに追懷に耽る餘裕も得なんだのである。それが今、纔に忙中の閑を得て、寒からず暑からずの小春日和に、雜踏の東京を跡にして、舊友に會ふの望を持つて、小鞄一つ、ステッキ一本の輕き身を、餘り込みあはぬ滊車の中等室に半ば横たへて、そゞろに我が身、人の身の昔を思うて、限りなき追懷の感に打たれるのである。

滊車は品川、大森、川崎と過ぎてゆく。覺馬は卷煙草の煙の間に只夢の如く昔を思うて居る、五年前の殆んど同じ頃、日夕相往來して居た八木の家と我が家とに、いづれ劣らぬ悲しき事が降つて湧いた。八木の家では三つになる男の子が其姉の跡を追うて同じ病で無くなつた。我が家では我が最愛の妻米子が急の病で無くなつた。人の家も、我が家も、忽ち火の消えた如くて、濕りがちに日を送つて、友達甲斐に互ひの愁を語りかはすのを、只せめてもの慰めとして居たが、我れは終に其無聊寂莫に得堪へずなつた。斯かる時、或人は酒に耽り、或人は遊びに耽り、又或人は更に新なる

家を作るの望を起すのであるが、我れには其のいづれも爲し得ぬのであつた。さればとて、我は又或人の如く、徒らに泣きくづをれて、くよくよとして一生を終るほどの女々しき男でも無かつた。そこで我れは終に蹶起して立つたのである。何程も無き金を懷にして、多くの人には知らせもせず、只八木と二三の人とに意中を陳じて、覇氣滿々、或日飄然としてアメリカに向つて去つたのである。

其時の我が心は今より思へば、ゲに幼きものであつたよ。よし天、我れに辛からば辛かれ、よし人、我れは冷くば冷かれ、我れは獨立の男子なり、天にも依らず、人にも依らず、我れは只我が力を恃むのみ、と思うて居た。よし我が妻を奪はゞ奪へ、よし我が子を奪はゞ奪へ、我等は妻子を奪はれて屈する者にあらず、男子情に敗れて當に大いに爲すあるべし、天をも恨みず、人をも恨みず、我れは只我が力の更に強からざるを恨むのみ、と思うて居た。嗚呼々々、愚かなる我が心であつたよ。天に依らず、人に依らずと思うたのは、其實、眞に天に依り、眞に人に依る事の、誠が足らなんだ迄である。天を恨みず、人を恨みずと思うたのは、其實、大いに天を恨み、大いに人を恨んで、反抗を試

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

みて居た迄である。
滊車は平沼、戸塚、大船と過ぎてゆく〳〵。覺馬は猶昔を思ひつゞけて居る。日はやう〳〵高くして、滊車の窓は暖かに照らされて居る。

（二）

覺馬の思は我が身の上より人の身の上に轉じた。八木郁彥はもと相應の富家に生れて、小學を卒業し、中學を卒業し、そのまゝ進んで大學を卒業し、文官試驗にも首尾よく及第して直に高等官となり、東京生れの美人を細君に貰うて家を持ち、一年の中にお時と云ふ女の子をさへ得て、何一つ不足なき幸福の身の上であつた。或時我れは彼れに向つて「此世をば我が世とぞ思ふ、望月の、缺けたる事も無しと思へば」と云ふのは君の樣な身の上の事で、君は是れから藤原の道長と改名するが善い、などゝ戯れた事もあつた。それくらゐであるから、八木には隨分殿樣風な所があつて、自惚も强く、我も强く、何でも世間の事は自分に都合よくばかり運んで行くものゝ樣に思うて居たらしかつたそれて自然、思ひやりも少く、察しも足らず、我れとこそは聊か相許す所があつて、特別に親しくもして居たれど、下の者などから慕はれるような男ては無かつた。

細君はお久さんと云つて、まだ年も若し、美しくはあり、氣は利いて、若手の奏任官八木郁彥の夫人として、天晴れ似あはしき人てあつたが、是れも苦勞を知らぬ東京そだちの派手娘て、人形ならば抱いてやるけれど、シヽをしたり、ウンコをしたりする赤ン坊を、どうして私に抱けるものかと、それて濟まして居る程のお孃樣であつた。それで田舍に行くと云へば島流しにでも會ふ樣に思ひ、貧乏人と云へば毛虫でも摘むほどに思うて居たのである。それでも自分の腹にアノ時ちやんが生れてからは、さすが母親らしい所も出來て、ツイ人の子を愛嬌じるほどの柔しさも付いて來て、大ぶん氣質が變つた樣に見えて居たよ。

それから八木夫婦がアノ時ちやんを可愛がつた事は又格別であつた。八木は自分の身がズン〳〵と筍の延びる樣に、何の障も無くやつて來た如く、我が子も亦其通りに何の障もなくスル〳〵と成長して行く事とばかり思うて居て、イツも時ちやんの健康を誇つて居た。お久さん（細君）は又、健康の事など考へもそめぬ樣子で、只時ちやんのキリヨウばかりを誇つて居て、人の子を見る時には、「マア可愛らしいお子さんですと」な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ど丶愛嬌は云ひながらも、實は我が子と見比べて、一段我が子に劣る所が、窃に愉快であつたに相違ない。

あれほどに可愛がつた時ちやんが、可愛ざかりの三つになつて、片言まぢりて憎まれ口を利く樣になつた時、或日突然ひきつけて、脆くも三日の間に無くなつたのであるから、夫婦の嘆は無理も無い事であつた。始めて彼等は始めて人生の悲惨を味はつたのである。始めて人生に不如意と云ふ事のあるを悟つたのである。而して、始めて彼等の身も亦他の人と同じ運命を免れぬ事を知つたのである。筍の芽は始めて折られ、望月は始めて少し缺けたのである。お久さんは殊にアレから暫くボンヤリとして居た樣であつた。

それでも、あれから程なく、丁度代りを與へられた樣に、龍吉と云ふのが生れたので、夫婦は元氣を回復して、龍坊々々と寵愛して、時ちやんと二人分大切にして居たが、是れが又兎角病身で、八木は「何に大丈夫」を繰返して居るし、お久さんは又、例のキリヨウ自慢に餘念も無かつたけれど、丁度時ちやんと同じほどの大きさになつて、丁度時ちやんと同じ樣に可愛らしくなつた時、丁度同じ病氣を起して、忽然として無くなつてしまつたのだもの。氣の毒とも何とも云ひ樣

の無い次第であつた。あの時の夫婦の萎れようは、雷に打たれたと云はうか、谷底に落されたと云はうか、いづれにしても僅に息が通うて居ると云ふ程の見えであつた。折角最初の傷が癒えて、二度目の若芽を吹きかけて居た所を、それを又むごたらしう折つて棄てられたのであるから、夫婦があの樣に弱つたのも實は無理の無い所であるのだ。

時ちやんも三つで死に、龍坊も三つて死んだ。此後幾たり生れても皆又直に死んでしまひそうな心地がする。死ぬるほどなら生れないが善いものを、折角三つまでも育てさせて置きながら、ぞれを取つて行くとはアンマリ聞えぬ、と云ふのがお久さんの愚痴であつた。芽を出せば折り、芽を出せば折り、それでは此上の勇氣の出ようが無いては無いか、と云ふのが八木の不平であつた。不平たら〳〵、愚痴たら〳〵、八木家の望月は缺けて又缺け、今にも闇にならうとして居たのである。

丁度其時こちらにも災が降つて來て、涙と涙、愁と愁、悲しき事ども語りかはして日を過ごしたが、こちらは少し年も若し、子に別れたと妻に別れたとは又少し異なる趣きもあつて、とう〳〵こちらは反抗心を燃

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し立てゝ、あの通りにして飛びだした。其時あちらは彌々萎れて、八木は官海に於ける立身の氣も挫けて、はか〲しくは勤めもせず、それにつけては健康も衰へて、兎角引籠がちに日を過ごして居た。お久さんは又、燃え立つて居た愛の火を消し盡して、氷の如き恨を抱いて、冷き〲心となつて、人の子などは見るも厭、手に觸れば身ぶるひがする樣なと、横を向いて此世を渡るスネ者になつてしまつて居た。

其後は三千里かけはなれて、ツイ半年一年も無沙汰をすれば、扨イツ何から書いて善いやら、とう〲それなりに音信不通、互ひに居處も分らぬ始末で、三年立ち五年立つた今日となつて見れば、我が身の上にも、心の跡にも、變つた事が隨分に多いと同じく、必ず人にも變りがあらうが、果して如何に變つて居るやら、富士の麓の退隠と云へば、それだけて既に趣味のある、頗る詩的な題目ではあるけれど、扨其人々の心の跡、あゝ〲、樂しみな樣な、氣遣ひな樣な、何とも云はれぬ心地ではあるわい。

滊車は國府津に着き國府津を發した。覺馬は頻りに思に耽つて居る。滊車は更に御殿場に着き御殿場を發した。晝近き太陽はいよ〲暖かに人を照して居る。

いざや滊車は覺馬の下るべき停車場に着した。

（三）　徳望ある此邊の長者

覺馬は小鞄一つ、ステッキ一本を携へて停車場におりたつた。是れよりいづれの道を取るべきかと、暫く立ちてためらう中、ツイ傍から

「オイ、坂本君」

と我が肩を叩く者がある。振向けば紋付の羽織を着た夫婦の人、それかと思うて見ながらも猶疑はれる容貌風采、されど善く見れば固より其人の目元、口元、

「ヤ、是れは八木君。奥さんも御一しよで」

「ハイ、御出迎に參りました」

「近いから坂本君、ブラ〲と歩いて行かう」

マア何と云ふ變りようであらう。人は是れを田舍じみたと云ふか知らぬが、質朴で、溫和で、さも愉快げに、さも滿足げに、見るから床しい姿である。三人打連れて野道を行くに、洋服の坂本を中に立てゝ、夫婦が右左から冊く樣にして、あちらでは又坂本を變つた〲と云ふ。如何に變つたかと坂本が聞けば、

「大層おとならしくおなりなされて」

とお久は云ふのである。「をとならしく」とは餘りのお言葉と云へば、

「そう申しては如何ですが、御苦勞をなされたセイか、おやさしき所が見えます」との事。

「あなた方こそ打つて變つた、樂しげなお姿に見えますが」と云へば、

「ハイ、私共は、今ではモウ何より樂しい身の上で御坐います」

「ナニ坂本君、我々は田舍者になつたまでの事さ」

八木は自ら嘲つて田舍者と云ひながら、其顏には滿足の光が輝いて居る。

「君の田舍者になつた所は、なぜか知らぬが大變に尊く見えるよ」

「そうか。君はあまりハイカラにならないね」

「そう〳〵、坂本さん。あなたはチットも洋行がへりの樣ては御坐いませんよ」

「誰に見しよとてハイカラなんぞになりますものか」

氣輕げには云つてのけたが、覺馬の聲には聊か異樣の響があつた。

「ほんとにお氣の毒て御坐いますねえ」

お久は早や其心を察して居る。覺馬は思はずもお久の顏を打眺めた。どうして此人が此樣にしほらしく、此樣に思ひやりぶかくなつたかと、怪しくさへも思は

れるのである。

「奧さん、それからお子さんは」

「ハイ、今では十人ばかり御坐いまする」

「ナニ十人」

「坂本君、今に善く話すよ。マア見たまへ、好い景色ぢや無いか」

打見やれば如何にも好い景氣である。苅りほされたる一面の田に續いた富士山は、裾むらさきに頂しろく立つて居る。

「君の家はどの邊だね」

「あのソレ大きな橙の木の見える處だ」

橙の、木と云ふよりは森と云ふが適當で、一むら黑く茂つて居るが中に、やうやう色づいた黃金の珠が累々と重なつて、遙に富士の雪と映えあつて居るのである。其橙の木の蔭に大きな茅葺屋根の一角が見えて居て、それが即ち代々八木家の邸宅であるとの事。

やうやう其家に近づくほど、鍬を肩にする人、牛を追ふ人、一人二人行きあへば皆うや〳〵しく敬禮して、一言二言、何か親しげに打語りて過ぎゆく樣、如何に此夫婦が德望ある此邊の長者であるかは、覺馬の目にも明かに知られた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いよ／＼其門に近づけば、橙の枝の蔽ひかゝりたる其門柱に、八木育兒院と云ふ札が見えて居る。覺馬は「ハテナ」と思ふ間もなく、又「なるほど」とうなづかれたのである。

「君、こんな事をやつて居るのか」

「そうだ。我々夫婦は君、澤山な子持になつたよ」

（四）永久の滿月を眺めて居る心地

茅葺の軒を入つて、導かれたは十疊の廣間、昔風の此古き家に、多少の新しき裝飾を施して、そこに又一種の趣味を生じて居る。縁側の障子を明けはなてば、少し斜に富士が見えて、例の橙の枝が其麓の片端を蔽うて居る。久しく歐米の風物に目なれて、歸つてからはマダ東京の雜踏より外を見なんだ覺馬には、此景色、此趣きが、實に珍らしく、床しく、嬉しく感ぜられるのである。况んや、それが心おけぬ親友の家である。况んや、細君は兼ねて用意の膳部を持出して、其手料理の風味を誇るのである。膳部といふは、丸き大きな食卓て、それに主客三人前の料理が載せてある。ビールの栓も拔かれてある。「私もお相伴いたしましよ」と細君お久もソコに坐る。「あゝ、思へば隨分久しぶりの會食だなア」と主人郁彦が云ひだせば、「實に久しぶりだ」「ほんとに久しぶりですね」と「久しぶり」が幾度となく繰返される。淡白なる魚、淡白なる野菜、厚き心、深き情、覺馬は此五年間に曾て覺えざる愉快を感じて、つく／＼と今更に家庭の味ひを思ふのである。

扨それよりは互ひの身の上を問ひつ、語りつ。先づ八木一家の變遷を聞くに、大要左の如き次第である。

望月の缺けはじめた郁彦の一身は、其後健康もいたく衰へて、肺さへ聊か惡いと云ふ、務の上にも種々面白くない事が生じて來る、お久もヒステリーとても云ひそうな容躰で、始終くさ／＼として暮して居る、其中又思ひもかけず國元の父親が頓死して、家の世話をする者も無いと云ふ始末、何やら斯やらて役も罷めて東京を引拂ひ、即ち今の此家に引籠つたと云ふのである。扨こゝに引籠つてから、母親の無くなつたと云ふ一事を除けば、運命の月は又此田舍の景色の間に光りはじめて、第一に郁彦の健康が回復する、お久の氣が變つて來る、其中この樣な仕事を始めて、大勢賑かな家内となる、土地の者には尊敬せられる、おひ／＼村の事をも世話してやる、郁彦の胸の中には折々功名心が湧かぬでも無かつたが、此田舍生活の樂しさに其れも消されて、今ではモウ夫婦ともに限なき滿足、限な

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き愉快の中に住して、永久の滿月を眺めて居る心地であるとの事。

覺馬は此話の一節づゝを聞く每に、「そうかなア」「そうかなア」と感に堪へぬ樣子であつたが、最後になつて、

「そうかなア。世の中は實に不思議な者だ、人生は實に微妙な者だ」と又今更に感嘆の聲を漏して居た。郁彦は思ひついて

「跡の話は又今夜の事として、君一つ内の育兒室を見て呉れたまへ」

「ウム、それはゼヒ見せて貰はう。ドレ」と覺馬が立ちあがる。郁彦もお久も續いて立つ。此時フト覺馬の目についたは、二つ並んだ大きな額、一つは女、一つは男、二つともに子供の肖像、問ふまでもなく時ちやんと龍坊、覺馬は暫く眺めて居る、夫婦も側に立つて居る、覺馬は幽かに嘆聲を漏したが、

「君、育兒室はアレかね」と忽ちに目を轉じた。三人は打連れて育兒室の方に趣いた。育兒室と云ふのは稍ゝ西洋風の小さき建物で、半分は疊、半分は板の間、板の間は遊び所、疊の上は寢る所。今板の間には五つばかりの男の子が木馬に乘つて遊んで居る。三つばかりの女の子は手鞠を持つて其側に立つて居る、疊の上にはスヤ〳〵と寢た子が二人、乳母に抱かれて乳を飮んで居るのが一人、そこに外から歸つて來たのは、草花をドッサリ積んだ乳母車、ムックリふとつた二人の子が、其草花に埋められた樣に向きあつて乘つて居る、押して來たのは七つか八つの女の子、是れはモウ大分お久の手助になりそうな。

「おつかさん、此お花を活けて頂戴」と七つか八つが自慢げに花を差し出す。

「オヽ奇麗な花ですね。今に活けてあげましよう」とお久は其勞を犒うて居る。

「菊ちやん、お花頂戴」と手鞠の子が走つて來る。

「僕にも、僕にも」と木馬の腕白もやつて來る。そこに又ワアッと恐ろしい泣聲が聞えて、四つばかりのが女中に抱かれてやつて來る。

「オヽ、どうした〳〵、轉んだか、よし〳〵、おつかさんが抱いてやりましよう」とお久は其子を抱きあげる。郁彦も側からアヤして居る。

覺馬は此景色に深く打たれて、一言も言葉は無けれど、云ふに云はれぬ嬉しげの微笑を漏して、只つくねんとして立つて居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（五）心の道行

覺馬は滊車の疲れを補ふ爲め、午後の二三時間を晝寢に過ごして、目さめて見ればお久が來て、「お湯が沸きました」と云ふのである。

湯からあがつて、富士の晩景を眺めながら又晩餐の食卓に着けば、今晩はおやかましくとも子供にもお相伴をお許しなされてとお久の挨拶。成程、七つ、五つ、四つ、三つ位のが四人五人坐つて居る。笑ふのがある、喋べるのがある、泣くのがある、それは〳〵賑かな事である。例のビールなど傾けて見てあれば、お久と女中とが左右から守をして、隨分と世話の燒けた事である。さりながら覺馬思ふに、五年間の歐米の食卓に、是れほど樂しげな、是れほど心ゆく、風情ある景色を見た事は無いのであつた。

食後は又三人の對話が始まつて、今度は覺馬の身の上ばなし。覺馬は例のヤヶ氣味の反抗心でアメリカに渡り、天にも依らず、人にも依らず、獨立獨歩で金さへ儲ければそれで無い、大金を攫んで日本に歸り、一威張り威張つて見せようと、只それだけの望であつたが、段々と不仕合せな目にも會ふ、案外やさしい外國人の手にも觸れて見る、少し考へも變つて來る、獨立など〻威張つて見てもダメな事だと氣がついて來る、やはり人にも依らねばならぬと悟つて來る、我れ一人が無理な事して金持になつた所で、それでは我れ一人の安樂に止る事、我れと人と相依つて、世界中の人が皆互ひに凭れあうて行かうとするには、大いに別な考へが入る事と、始めて是れまでの愚を覺つて、丁度其頃、或敎師から社會主義の說を聞いて、豁然として夢の醒めた心地がして、我れ此主義の爲に生涯を捧げんと決心して、それから歐羅巴の諸國をも巡回して、社會主義の名士にも交はり、勞働社會の事情をも探究して、モウ大概世界の形勢も分つたし、將來の大勢も見えて來たので、そこで此主義を日本に行ふ爲め、今度やうやく歸つて來たのであるとの事。

八木夫婦は此話に深く感じて、郁彥は頻りに社會主義の事に就いて話つて居たが、お久は又、

「それにしても阪本さん、早く善い奧さんをお貰ひなさらねば」と切出した。覺馬は一向乘らぬ顏て、

「私は奧さん、今はソンナ氣は全くありません」

「でもあなた」

「いや全くです」

それについて八木夫婦が覺馬の說を聞くに、覺馬は

稍暫く沈吟して後、

「僕は君、最初、天にも反抗する氣で、女房を奪はゞ奪へ、そんな事に屈するものかと思うて居たが、後に段々考へて見ると、それは淺はかな人間の我であつて、少し深く天意を察して見れば、如何なる場合にも謹んで天命に服從するより外は無いのだ。それで、妻があれば在る所で、それ相應の働きをする、獨身になれば爲つた所で、それ相應の働きをする、それが正當であらうと僕は思ふ。夫婦者には夫婦者の天職があり、獨身者には獨身者の天職がある、いづれにしても天職を盡すのであるならば、僕は今現に獨身者であるから獨身者の天職を盡さうと思ふのだ。何も必ずしも人が皆結婚せねばならぬ事はあるまい。それに又、今の世に立つて社會主義などを唱へるには、進退自由の獨身者を要する場合が甚だ多いてあらうと思ふ。そこで其必要に應ずるのが即ち僕の天職であらうと僕は堅く信じて居る。それに又、僕には生きた妻こそ無いが、死んだ妻はイツまでもチヤンと在るのだ。形にこそ無いが、僕の記臆の中にはチヤンと在るのだ。生きて居ても、死んて居ても、僕に對して妻が在るには相違ないのだ。それで

僕は、今ではモウ、妻の死んだ事を恨みには思はぬ。死ぬるも生きるも天命だ。死ぬれば又死ぬる所に妙味がある。僕の今日の境遇に天職があるならば、妻の死は實に必要であつたかも知れぬ。妻の身から云へば、彼れの死其者が實に大いなる事業であつたかも知れぬ。奥さん、僕の考へはマア斯んなものですが、あなたドウお考へなさいます」

「其樣に仰しやると何だか涙がこぼれさうで御座います」とお久は目をしばたゝいて居る。八木は頻りに感嘆して、腕を組んで大息を吐いて居たが、

「阪本君、君も大分悟つたね。お互ひにツライ目を見たからなア」

「さうさなア。苦勞もしたし、年も取つたし、ちつとはマジメにもならうぢや無いか。それでマア僕の方の話は濟んだが、君達夫婦が此育兒院を思ひたつたに就いての、心の道行を話して聞かして呉れたまはぬか」

「いや、それを今折角話したいと思うて居たが」と郁彦はお久を顧みて、

「それは寧ろお久の事業だから、お久、お前からお話し申さぬか」

「では私からお話申しませう。實は私も聞いて戴きたいので御坐います。私は御存じの通りの我儘者で、善いにつけ、惡いにつけ、自分の事ばかり勝手な事を考へて居ましたが……」

「さう〳〵、龍坊のお亡くなりの跡で、奥さんは確か、人の子に手が觸ると身ぶるひがすると云ふお話てしたね」

「さうでしたとも、さうでしたとも。人の子なんぞモウ見向くも厭て御坐いましたが、東京を引拂うてコチラに參りましてから、何だか寂しくて〳〵、物足らぬような氣が致しまして、又子供が欲しいと思ふようになりました」

「お久は君、元來の子供嫌ひて、それが二度の打撃にヒネくれてしまつて居たのだが、それでも一度蒔かれた愛の種はイツまでも枯れぬもので、とう〳〵又芽を吹いたのだらうと僕は思つて居るよ」

「成程。それに奥さんは又大の田舍嫌ひてしたね」

「え〻〳〵、田舍と蛇とは大の嫌ひて御坐いましたが、龍坊が無くなつてから、賑かな所が厭になりまして、ドコか人の一人も居ぬ所に行きたいと思うて居りました。それてコチラに引込むにも喜んて參つたので御坐います。參つて見れば景色は善し、ホンに田舍は善い者だと思ひました。之れも龍坊に敎へて貰つた樣なもので御坐います。それから子供が欲しい、子供が欲しいと思うて居りましたが、宿も病身にはなりましたし、私も色々病氣が起りまして、お醫者に聞いても迚もモウ子供の出來る望は無いと申されましたので、それからフト貰ひ子をしようかと思ひつきましたのが、今の仕事の緒口で御坐いました。丁度其頃此村に、三つと乳呑と二人の子を殘して夫婦ともに亡くなつた家がありまして、村中が寄つて相談しても、別に親戚と云ふ程の者も御坐いませず、どうして善いやら手の付け樣も無い始末て、ほとほと困つて居ると云ふ話を聞きまして、ツイ私も見舞に行つてやりましたが、見れば其子供の可愛らしさ。乳呑の方が泣いて居るのでチヨツトそれを抱ますと其儘すぐに泣きやんでしまふ、下に置くと又泣きだす、抱きあげれば又泣きやむ、如何にも見棄て〻歸りかねましたので、とう〳〵内まて抱いて來ましたが、それなりけりて二人とも、とう〳〵内て世話する事になりまして、それが此育兒院の始りて御坐います」

「それてね、阪本君。僕はツク〴〵と思つたよ。あ〻

云ふ性質のお久が、人の子供を大勢預つて、うるさいとも思はずに世話する樣になつたとは、全く自分に子を持つたお蔭だね。して見ると我々は子供の爲にも感化せられて居るので、三つ子の感化力も亦隨分ゑらいものだと思ふね。そう考へて見ると、お時も龍吉も此世に生れた甲斐が無い譯では無い。君が君の細君について云ふ通りで、三つで死ねれば三つで死ぬる所に大いなる意味があるのだね」

「そうだ、そうだ、實にそうだ」

「それでね、僕は其時深く考へた。先刻も云ふ通り、白狀すればマダ僕にも多少の功名心は燃えて居たが子供の死んだのも、僕の病氣になつたのも、こゝに引込む事になつたのも、お久の考への變つたのも、それが皆自然の配劑かと思はれて、それに從ふのが即ち君の謂ふ天職であらうと思うたので、それで其二人の子供を預つたのを手始めに、とう〳〵此育兒院を僕等夫婦の生涯の事業としたのだ」

「あゝそうか。實に君立派な事だね。僕は御夫婦に感謝する。それから此（肖像の額を見あげて）時ちやんと龍坊とに深く感謝する。此二人が身を殺して君等夫婦に多くの孤兒貧兒を養はせるのだ。君の云ふ通り三つ子の感化力も實にゑらいものだね」

夜は既に更けて十二時となつて居た。三人は暫く無言で子供の肖像を眺めて居た。

（六）　無限の滿足、無限の安心

阪本覺馬は富士の麓の好風景の中に、多くの孤兒と共に八木夫婦の暖かき情に打たれ、樂しき散步と樂しき談話とに猶二日を過ごし、無限の滿足を感じ。無限の安心を得て、四日目の早朝八木夫婦に送られて、東京に歸るべく再び彼の停車場に來た。

「それでは是れでお別れとしよう。八木君、僕は君の家を自分の內だと思うて居るから、戰ひに疲れたら又休息にやつて來る。奥さんドゥゾ外の孤兒とおなじ樣に私をも可愛がつて下さいませ」

「オホ……又善い奥さんを見つけて置て上ますよ」

「いや奥さん、其事はモウ仰しやつて下さいますな。私はドコまでも此主義を妻として居りますから」

「そうさなア阪本君。君は社會主義を妻とする、僕等は育兒院を子として居るのだ。大小は兎もあれ、それで無くて事業が出來るものでは無い。ヤア汽車が來たようだ。左樣なら」「左樣なら」

「左樣なら」

（をはり）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●子なき人に與ふる書について

本誌第二號の「子なき人に與ふる書」について新潟縣西蒲原郡曾根町の古島安二君から左の疑問を提出せられた。

一体人間が子をほしがるには御示しの如く種々の原因がありますが、多數の人のほしがる最大原因は此衣食問題に係つて居るてあらうと思ひます、……然るに老人保護の道の少しも無い現今に於て、假令利益交換的なりとは云へ、之を有害無益の理由なりとするは、少し酷てあるまいかと思ふのです、……生存競爭の激しい今日の有様で己れの子よりてなかつたら、誰から老人達は保護扶養を受ける事が出來ましやうや、

是れは實に御尤もの疑問であります。生存競爭が激しくて、生活の不安を極めて居る今日の有様では、人が皆老後を氣遣つて、謂はゆる「掛り子」を欲しがるのは、實に無理も無い事で、其考へを惡いと云ふのは或は酷であるかも知れぬ。然し、隣の娘が美しい着物を着て居るのを見て、內の娘がそれを羨ましがるのは無理も無い事て、それを叱るのは或は酷であるかも知れぬが、さりとて「人を羨んでも善い」とは教へられまい。それて我輩も「我が老後の衣食を得んが爲に子を育てるのは不都合だ」と云ふのである。况んや、其目的を以つて態々養子をするに於てをや、それこそ又一段の不都合だと云ふのである。然し、如何にして其考へを防ぐべきかと云ふに、一方には少しづゝでも老人保護法を設けて總べての人に老後の安心をさせる、そうして一方には、銘々の心掛で、成るべく老後の生活費を貯蓄させる事にするより外は無い。それて「親は成るべく子に迷惑を掛けぬようにすべき者」「親は必ずしも子に養はるべき者では無い」と云ふ考へが廣まつたならば、先祖傳來の田畑を賣飛ばして息子を大學に入れると云ふ程の馬鹿もせぬようになるてあらうし、息子の立身の妨げとなるのも構はずに强いて親の膝元に引付けておくと云ふ分らず屋も無くなるてあらうと思ふ。然し、老人たる者は、五十年、六十年、此社會の爲に忠實に働いて來た者であるから、其老後を安樂に過ごさせて貰ふ權利がある。社會から云へば、老人を

安樂に過さすべき義務があるのてある。それて養老年金の案も出て來るし、又數十年勤勞をする間に相應の貯蓄の出來るだけの報酬を社會から拂ふべき筈てある。然し、今の社會ては、年金制度も容易に出來そうになし、貯蓄も隨分困難てあるから、止むなく老人が子に養はれねばならぬ事になる。又場合に依り、子を育てる爲に全力を注いで、それが爲に我が老後の用意が出來なんだと云ふ事もある。其場合において、子が感謝して親を養ひ、親も亦安んじて子に養はれるのは當然の事てある。然し、それは必ずしも子を育てたから子に養はれると云ふては無く、久しく社會の爲に働いた人てあるから、社會は何等かの方法を以つて之を養はねばならぬのてあるが、差しあたり其方法が無いので、それて尤も關係の近い子が之れを養ふ事になるのてある。それで結局、子を育てるのは我が社會の爲に義務を盡すので、我が老後の衣食は我が若き時の勤勉勞働の結果に依る事として、成るべく我子に迷惑を掛けず、我子の自由を妨げぬようにと、常に心を用ゐねばならぬと云ふのてある。

又、此頃我輩の友人夫婦が、生れたばかりの幼き人を養女にして、「僕も養子を無益の事とは思へど、人の子を見れば可愛くて、なんでもかでも欲しくて堪らぬ、それてトウ／＼今度ひとり貰ふ事にした」と云ふ通知があつた。我輩はそれに答へて「僕とても、どんな事があつても養子をしてはならぬと云ふのては無い。若し其養子をする事が、君等御夫婦の爲にも幸福てあり、又其御本人の爲にも幸福てあるならば、僕は決して其れに反對する者ては無い」と云つた事てある。第二號にも「若し又自然の因緣にて、貧しき人の子、或は孤兒などの、恰も我が手に授けられたるが如く、恰かも我が手に托せられたるが如く感ずる場合もあらば、それこそ引きとりて我が子の如くに育てたまふも、亦是れ天意に從ふ所以かと考へます」と書いておいた。右の友人の場合は、善く事情を聞いて見るに、實に之に當つて居るのてある。然し、我輩は猶其友人に云つた事てある、世の中には有がた迷惑と云ふ事があつて、こちらでは親切の積りで色々の事をするのが、あちらては甚だ迷惑になつて居る事がある。そこを善く考へて、人の身に迷惑を掛けぬように、不自由を感ぜしめぬようにと、常に注意して居らねばならぬと。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●「隅田川邊の好家庭」に就いて

「隅田川邊の好家庭」と題する本誌前號の記事について、佐々熊太郎氏のお宅には數へきれぬほど訪問者があつて、中には夫婦づれて二度も訪問して、家庭の事一切此通りにやつて見たいからとて、家内中を仔細に見せて貰つた人もあるとの事。

又、或建築技師は、佐々氏の家に倣つて新築をして呉れとの注文を受けたとやらて、ぜひ佐々氏の家を一覧して其見取圖を取つておきたいからとて、我輩の所に紹介を求めに來られた。

又、我輩の友人の或者は「少し金が出來たらば僕もぜひあの通りの家を作りたいものだ」と云つて居た。

又、面白い事には、あの記事を見てミシンの事を佐々氏に問合はせた人が大分あつて、佐々氏の知つて居られるミシン屋て其爲に五六臺賣れたと云ふ。

又、佐々氏の子達は七人てあるのを、我輩は聞きちがへて六人と書いた。それて佐々夫人は戯れに「私は子供を一人堺さんに殺されました」と或人に話された。

又、佐々氏の臺所については甚だ簡略に書いておいたが、あれは態と簡略に書いたのでは無く、實は我輩

の觀察の行屆かなんだのである。それて臺所の事は赤ン坊の着物の事と共に、他日又あらためて書く機會があらうと思うて居る。

●妙な蜘蛛　ジャバの森林に住む一種の蜘蛛は、小刀で無くては切れぬほど丈夫な網を作つて居る。又米國のテキサス州に住む或蜘蛛は、長さ二尺、幅二尺位の風船を作つて、一家族の旅行用に供して居る。初は一本の系で其風船を木に結びつけておいて、時分を見計らうて其系を切つて、そして遠方に移轉するのである。それからおかしい事には、雌の躰が雄よりもズット大きいので、家内に風波が起る時には、雌はサッサと亭主を喰つて仕舞ふから勝負が早い。

●寢臺汽車の忘れ物　紙入、寳石、切符、帽子、ステッキ、鞄などは珍らしく無いが、曾て義足が一本殘してあつたのと、乳母が赤ン坊を忘れて行つたのとには驚いた、と或車掌の話。

▲厚ぶすまにこやが下に掻抱き寢んと思ひし稚子はいづらは　景樹

▲おのづから子もたる人に訪はるれば甘えて落つる我涙かな　景樹

▲懐の玉はくだけて兼れて無し夜たゞ鳴る神おちばおちなん　景樹

▲夜たゞ降る時雨の雨にぬれとほり小松が下に獨り居るらん　景樹

不二彦

予の長男不二彦は明治三十年十月十七日東京芝高輪車町の予の家に生れた。

ふじ山に向ひ立ちてもふさはしき
　男の子になれと祈るなりけり　利彦

日にそひて長びゆく藤の花房の
　其の名に負へる我が子なりけり　美知

明治卅二年八月廿七日彼れは大森停車場に近き予の家において脳膜炎に罹つた。九、十、十一、十二の四個月間、彼れは昏睡して病床に横たはつて居た。

富士やうやく雪おほくして見るべきに
　名に負ふ我が子消えんとすらし　利彦

十二月廿二日彼れは終に消えてしまつた。彼れの此世に在つたのは二年と二個月と五日であつた。此肖像は卅二年四月廿日の寫眞に依り、友人德永柳洲君の筆に成りたるもの。

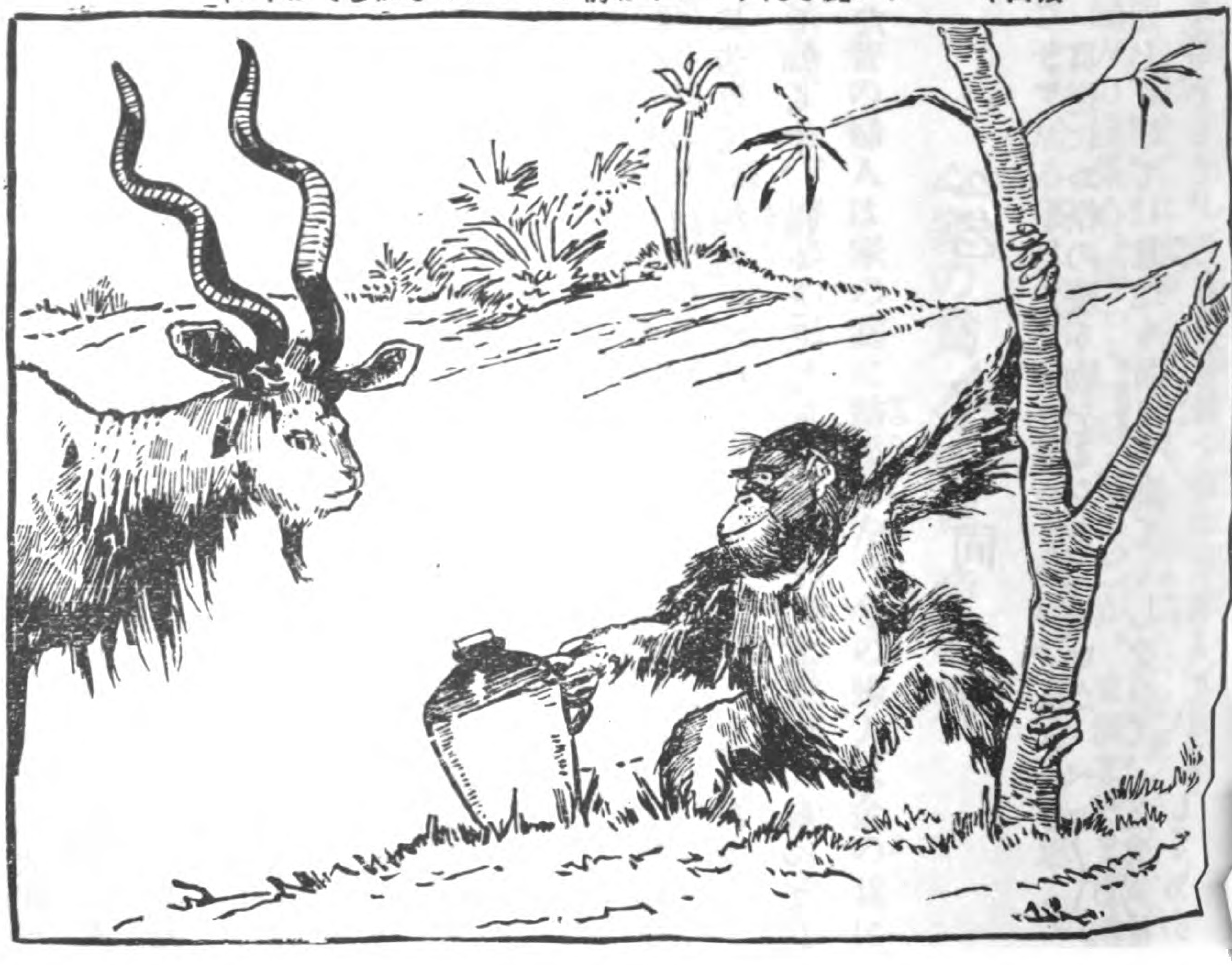
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●柿山伏（狂言）（第卅一頁を見よ）

▲山伏「罷出たるは、大峰葛城參詣致し、只今下向道で御ざる。好き序なれば、擅那廻を致さうと存ずる。先々そろ〳〵參らう。やれ扨、何とやら物ほしう存ずるか、まだ先の在所は程遠さうに御ざる。何と致さうで。いえコヽに見事な柿が御ざるほどに、一つ取つて食びやうと存ずる▲柿主「罷出たるは此あたりの者で御ざる。今日も行て又柿を見舞はうと存ずるこ何と致してやら、鳥がついて迷惑致す。いえこヽな、鳥が食ふかしこ蔕が落ちたが、わヽ、核も落ちるが、上に鳥が居るか。いえ、山伏が上つて居るが、何と致さうぞ。いや彼奴をなぶりませうぞっはア、上に猿奴があがつて居る▲山伏「はア柿主奴が見付居つた。何と致さうぞ▲柿主「はア、あれは猿ぢやが、身ぜヽりをせう事ぢやが、身ぜヽりせぬ、異な事ぢや▲山「わ、某を猿ぢやと云ふが、はア、こりや身ぜヽりしませうず▲柿「ふん、猿にまがふ所はない。猿なら鳴かうぞえ▲山「はア、こりや鳴かざなるまい。キヤ〳〵▲柿「はア、猿にまがふ所はない。猿かと思へば犬ぢやげなわいやい▲山「はア、又こりや犬ぢやと云ふ▲柿「犬なち鳴かうぞよ▲山「はア、又こりや鳴かざなるまい。ピヨ〳〵▲柿「はア、犬ぢや〳〵。犬かと思へば鳶ぢやげなわいやい▲山「はア、又こりや鳶ぢやと云ふ▲柿「鳶なら飛ぼぞよ▲山「飛ばざなるまい▲柿「鳶なら飛ぼぞよ、鳶なら飛ぼぞよ、〳〵〳〵。ありや飛んだわ▲山「あ痛、痛。やいソコな者。某が木の空に居れば、貴い山伏を、いや犬て候の、猿て候のと云うて、なぜに腰を抜かしたぞ。急いてくすろうて返せ▲柿「やいソコな者。柿を食うて恥かしくば、御免なれと云うて、おつとせていれ。

…………

猿曰く　クヅ鹿さんチヨツトお前のセンヌキをかしておくれ



偶感

△馬鹿な男

女房の虚榮心を滿足させんが爲に、大切な男の頭をムザ〳〵と人の前に下げる場合が無いとは云はれぬ。されば細君たる者、御亭主にねだつて帶を買ひたる時、羽織を拵へたる時、其金の如何にして得られたるかを穿く〳〵詮索して見ねばならぬ。亭主の面目を傷つけさせて、そして自分が綺羅を飾つたとて、それが何て嬉しからうぞ。

所が、世間には隨分馬鹿な男があつて、女房の手前を飾らんが爲に、外では如何なる耻をも耻とせぬ者がある。それに氣のつかぬ細君が若しあるならば、それは又隨分のウッカリ者と云はねばならぬ。

△妻妾に驕る

孟子と云ふ本にコンナ話が書いてある。齊の國の或人が一妻一妾を持つて居た。いつでも外に出れば必ず

酒肉に飽いて歸つて來る。其妻が「マアどなたと御一緒に其樣に召しあがる」と問へば、いづれ皆富貴の人々てある。所が、それほど富貴の人と交際するにも似ず、一向にエライ人が尋ねて來ぬ。是れは少し怪しいと云ふので、其妻が其妾と相談して、或日ソッと良人の跡を付けて見た。どこまで行つても誰ひとり會つて話をする者も無い。とう〳〵或お祭の處に行つて、殘り物を貰うて食うて居る。それでも足らねば又外をさがして歩く。そんな事をして腹を肥して居るのである。そこで其妻は戻つて來て、淺ましい良人の行ひを其妾に告げて、相抱いて中庭に泣いて居た。良人はそれとも知らず、得々として歸つて來て、其妻妾に驕つて居た。

△乞食同樣

眞逆にお祭の殘り物をこそ貰ふまいが、ペコ〳〵と頭を下げて、意地も面目も棄てゝしまつて、乞食同樣な事をして、汚れた金錢を兩手に攫んて、そして知ら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぬ顔をして内に戻つて、イヤ今日は誰々と一緒に飯を食つて來たなどゝ、得々として其妻妾に驕つて居る連中が隨分と少くない。

△教科書事件

教科書事件は正に其適例ではあるまいか。彼等が不正な金錢を得て其細君等に誇つた時、其細君等は果して何と思うて居たであらうか。只働きのある御亭主だと有がたく思うて、帶だの、羽織だの、平生からねだつて居る品物を買ひそろへて、無暗と嬉しがつて居たであらうか。さりとは淺はかな心得と云はねばならぬ。教科書事件の何分の一は必ず是等細君の虚榮心から起つて居ると我輩は考へる。

△ミエ好みの罪

曾て或若夫婦が二人一しよに自殺して、新聞紙上に夫婦心中と歌はれた事があつた。それは勤先の會社の金を使ひこんで、逃れるに道が無くなつたからであつた。其時、其細君の書置の中に、今度の事は皆自分が惡いので、自分が平生からミエを好んで、衣類や何かを餘り夫にねだりすぎたから起つた事であると、深く其罪を懺悔して居た事を我輩は記臆して居る。

自殺までには至らずとも、犯罪までには至らずとも、婦人の虚榮心(即ちミエ好みの心)が、立派な男を墮落させて居る事は、殆んど數へきれぬであらうと思ふ。

△家の爲、金の爲、愛の爲

昔の婦人は家の爲に結婚した。今の婦人は金の爲に結婚する。將來の婦人は眞に愛の爲に結婚せねばならぬ。愛の爲とは決して肉慾、情慾を指すのでは無い。愛の爲は即ち事業の爲である。其愛の力を以つて多くの大いなる事業を成さんが爲である。

△少年の美、老年の美

少年には少年の美があり、老年には老年の美がある。紅顏の美と白髮の美と、果して何れが優るとも云はれぬ。又、少年の美は多く天賦の美、遺傳の美で、老年の美は多く修養の美、克己の美である。其點から見れば、老年の美は少年の美よりも貴いのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

讀者の顧問

▲身躰薄弱なる者の結婚の可否

越中國の某氏より左の通りの手紙を受取つた。其マジメなる事、我輩敬服の至である。

小生は無産無教育の者にして商店の雇人に御座候、家族は母五十六歳、弟十八歳にて目下些少の資本にて干麵類の製造業を營み居候、小生年齡廿四歳、身の丈五尺、體量十一貫五百目の倭小薄弱なる者に御座候、就ては數年前より小生の如き倭小なる者の妻帶する事は婦人の權利を侵す者と信じ居候、云ふ迄もなく夫たる者は妻の信賴を受くるに足る資格を要する事と信じ居候、又親たる者は子孫に健全の身體を與ふる義務ある者と信じ候、小生は斯樣の信念の下に於て今日迄種々妻帶に關する件を處決致し居候、……小生の信念に誤謬無之候や、……御教示下され度候、

追而、小生は病身に非ず、身體の倭小に應じて弱きなり、日本生命保險會社の檢査には掛金割増にて合格せり、又、小生は年中二百日以上商用の爲め旅行するも婦人の德を侵害したる事なし、

是れに對して我輩熟考するに、某氏は遠慮なく結婚して麗はしき家庭を作るが當然であると思ふ。勿論、身躰の甚だしく薄弱なる者は、自己の衞生の爲に、配偶者に不幸を嫁せしめざらんが爲に、及び惡しき遺傳

を殘さゞらんが爲に、結婚を思ひ止まるべき筈である。是れは其人の社會に對する德義である。然しながら、身躰薄弱と云ふも畢竟は度の問題で、ドコまでが薄弱で、ドコからは薄弱で無いか、そんな事がハッキリと云はれる者では無い。そこで友人にも相談するが善し、醫者の說も聞くが善いが、結局は自分の心持で決するより外は無いのである。自己の衞生の爲から云へば、結婚したからとて十分に注意してさへ居れば、何も必ずしも身躰を害する筈は無い。結婚せずとも種々の不養生をやれば、其方が却つて惡いかも知れぬ。次に、配偶者に不幸を嫁せしめると云ふ點から見ても、身躰薄弱と云ふ事ばかりが罪では無い。如何に頑丈な男を亭主に持つても、其男が道樂者であつたならば、其妻はヤハリ不幸な身の上となるであらう。如何に病身な人を夫にしても(よし其結果として、貧乏な苦しい暮しをせねばならぬ事はあつても)、其人の心が柔しくて淸き愛に充ちて居たならば、其妻はヤハリ幸福な身の上であるであらう。よしや又、萬々一、若くして其人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に死に別れるような事があつたとしても、亂暴な亭主にナグられて追出されたに比ぶれば、やはり其方が幸福ではあるまいか。斯く考へて見る時は、身躰薄弱と云ふ事の爲に、必ずしも結婚を遠慮するには及ばぬ筈である。次に又、遺傳の點について考へて見るに、是れ亦我々人間の淺智慧を以つて輕々しく斷定すべき事では無いのである。勿論、遺傳は爭はれぬ者で、又甚だ恐るべき者ではあるが、躰質の遺傳と共に性質の遺傳もある事ゆゑ、何も必ずしも身躰薄弱ばかりを罪とする事は出來ぬ。

如何に身躰は薄弱でも、强き心と美しき情とを遺傳するならば、それは即ち社會に對して少からぬ功を立てた譯である。又身躰强壯を誇つて居る人でも、飲酒や放蕩の爲に種々の惡疾を遺傳して居る實例は澤山にある。されば、著じるしく明かなる者の外は、身躰薄弱なりとて結婚を思ひ止まる必要は無いと思ふ。

某氏の場合について考ふるに、身躰薄弱なりとは云へ、一年の半分以上を旅行に過し得るほどの健康を持つて居らるゝ以上は、決して結婚を思ひ止まるほどの必要は無いと思ふ。某氏は又倭小と云ふ事を繰返して云つて居られるが、是れこそ少しも遠慮するには及ばぬ事である。勿論、我々は日本人の躰格の小さき事を殘念に思ふ者ではあるが、さりとて梅の谷、常陸山、大砲などゝ云ふ大人物ばかりに子を産んで貰ふといふ譯にも行かぬ。日本國民の力量と品位とは決して躰格に依るのでは無く、主として其性格に依るのである。某氏の如く、マジメにして、謙遜にして、守る所ある人物が、其善美なる性格を次の時代に遺傳せん事は、我輩の切に希望する所である。

然しながら又、更に他の一方より見る時は、自己の躰格の不完全を知つて、社會に對する德義を考へ、それが爲に自己の慾を抑へ、樂みを殺ぐのは、實に大丈夫の勇猛心と云はねばならぬ。人は男女結婚して夫婦となり、家を作り、子を産むのが當然ではあるが、それは一般多數の人について云ふ事で、少數なる特別例外の人も亦此社會に必要があるのである。そこで或種

の人が、我れこそ其特別例外の難局に當らうとて、自ら進んで獨身生活を試みるのは、亦甚だ尊敬すべき事である。云ふ迄もなく、獨身者は結婚者に比べて進退が自由て、結婚者の爲し得ぬ事をも獨身者は爲し得る場合がある。そこで此社會は多數の結婚者を必要とすると同時に、亦多少の獨身者をも必要とするのである。されば結婚者には結婚者の天職があり、獨身者には獨身者の天職があるのである。善く此天職の在る所を知る者は、結婚にも、獨身にも、安心して生活する事が出來るのである。そこで若し某氏が、善く其天職を察して、敢て獨身生活を撰び、妻子に注ぐべき愛を以つて、隣人、友人、其他一般の人に注ぎ、妻子と共に團欒の家庭を作る代りに、此全社會を以つて我が大家庭と爲し、悠々として樂み、孜々として勉むる事を得るならば、我輩は亦其獨身生活を尊敬して、大いに某氏の德を賛するに躊躇せぬ者である。

▲**舊信仰と新思想との衝突**

米澤の一ッ葉生より、是れも結婚問題について御相談があつた。御相談の次第はザット左の通り。

> 近頃小生に對して結婚の申込がありましたから……十分の取調をした結果は……自分の理想に近い女として結婚の承諾をする事としました、處が……此頃故郷の兩親に對し其意見を伺つた處、昔氣質の兩親は我子善かれと祈る親切氣から此事に付いて占つたそうです、不幸にも其結果は不吉と出たので、兩親の心配は一方でなく、出來る事なら此結婚を見合せよと云ふ意見でありました、
>
> 御參考までに双方の年齢を申上ぐれば、小生は本年廿六歳、相手方は本年十七歳、
>
> 而して占者の言は、(一)本人(即ち小生)は本年十月頃喜ばしき出來事あるも此結婚を爲さば此喜びに會ふを得ざるべし、(二)此結婚は初は夫婦和合して大吉の如く見ゆるも後日女の身より難事起り同居する能はざるに至るべし、と云ふのであります、此第一の方は小生が他の地に轉任の沙汰のある事を指したものと思はれます、

此樣な事は今の世の中の殆んど到る處に起つて居る難問題で、道理から斷ずるには誠に譯も無い事でありながら、扨實際の解決には非常の困難を覺えるのが通例である。それで之れは云ふまでもなく、舊信仰と新思想との衝突で、新思想を以て舊信仰に對すれば譯もなく之を破り得る筈であるが、只子を以つて親に對するのであるから、事が甚だ六かしくなるのである。親は固より「我子善かれと祈る親切氣」からではあるが、それと同時に、知らず〳〵の間に、我子に對する干渉

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

權、命令權を自覺して居るのである。子を獨立の人と見て、其獨立を尊敬して、助言や忠告は與へるとも、決して其自由をば妨げぬと云ふような考へは、迚も今の世の老人達に望まれる事では無い。又、子としては、思想の自由は有して居ながらも、親に背いて一身の處置をするには忍びぬ、さりとて如何に親の意見なればとて、全然それに服從して我が意を曲げてしまふにも忍びぬ、そこで其爭ひの爲に非常なる煩悶苦痛に陷る。或者は親と云ふ名に畏れて心ならずも其意に從ひ、生涯不愉快なる家庭を作る事になる。或者は又、終に自由なる結婚を遂げながらも、永く親に背くの苦痛を嘗めて居る。或者は又、背く事をも敢てせず、從ふにもサスガ忍びず、失望の間に數年を送りて、終に謂はゆるヤケを起して、取返しのつかぬ墮落をやる事になる。それで親に對して云へば、親が子の結婚に干渉するのは、實に察しの無い話で、親の心は「我子善かれ」の餘りでもあらうが、子に取つては有難迷惑の至であるから、我子を苦めまいと思ふならば、成るべく其自由に任せる事にして、今の世の事は今の世の人の思ふようにやらせて置くが善いと、斯う說いて見たいのであるが、老人達は滅多に我輩の雜誌など見ては呉れず、よし又見て呉れた處で、五十年、六十年、永い間に堅めた頭が、さう〳〵急に動くものでも無し、そこで今の世の中で折合をつけて行くには、どうしても若い者の方で年寄を呑込んで、何とかして其御機嫌をも損ねず、我が思想の自由をも妨げぬような、うまい方法を考へ出さねばならぬ。

それで一ッ葉氏の場合について考ふるに、先方の娘御も十七と云へばマダお若い(寧ろ若過ぎる位)ではあるし、御當人も廿六と云へば何も急ぐ事のない年頃であるから、兎も角も此緣談しばらく預りとしておいて、「十月頃の喜ばしき出來事」をも待つて見て、扨來年にもなつて見たら、占者の說も又どう變るまいものでもなし、卯の年には凶であつた事も辰の年には吉になるまい者でもなし、其中又ゆる〳〵と親達にも說いて見たらば、何とか折合のつく時節もあらうかと思はれる。

樂しき生活

△郡長の一家族

木下洄村

…岡山縣の僻陬の地に郡長を勤めて居られる人、家族は御主人夫婦と子供が四人、長男は今高等學校在學中、次男は親族へやつてある、現に始終內に居るのは長女の十八九になられるのと、次女の十二三で今高等小學在學中のとてあるから、夫婦に子供が二人、下婢が一人、犬が一匹の生活である。

主人は誠に溫厚淳撲の君子で、和歌が上手、詩も出來る、茶や花にも通じて居られる、書畫盆栽なども好て、よほど脫俗の趣きがある。人に接するに少しも城府を設けず、官吏風などは微塵も見えぬ。

夫人は後妻で、四人の子供は皆前妻の出であるそうなが、其の母子の愛情と云ふものは、誰が見ても繼母と繼子との樣には思はれぬ。夫人は才智があつて、學問の素養があつて、親切で、謙遜で、主婦として殆んど理想的である。

孃樣達に就ては多く云ふを好まぬが、一寸した言語動作までが、何となく床しく麗はしく思はれる。

下婢は此地の者で郡長來任當時から引きつゞき數年間務めて居るが、夫人の懇篤なる躾に依つて、今では坐作進退、應接辭令、よほど整つて居る樣である。

犬はブチと云ふが餘り美い犬とも思はれぬ。只、洋服を着るか、靴をはくかして居る人さへ見れば、主人公でも遠慮はない、吠えるのが一藝である。

平日主人は役所に、小さい娘は學校に行かれるので、跡に殘る夫人と大きい娘とは、下婢を督して掃除やら、裁縫やら、讀書やら、點茶活花やら、來客の應接やらで、お二人の歸りを待つて居られると、先づ「只今歸りました」と孃樣が歸られて、いろ〳〵學校のお話で喜んだり、笑つたりして居られる。暫くするとブチが塀の內で吠えだすので、お父さんのお歸りでは無いかと話して居られると、靴音が次第に門內に運ばれる、ブチの聲は止む、いよ〳〵お父さんのお歸りと云ふの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、奥さん嬢さんも皆滿面に笑を湛えて、「お歸りになりましたか」と玄關にお出迎になる。鞄を取るやら、帽子を取るやら、洋服の裾に取りつくやらで奥に通られる。總がゝりて洋服を脱がせる、和服を着せる。煙草盆は淸かに、火は新である、白湯は沸いて居る、茶は入れられる。お留守中の來客や、來狀や、色々の出來事について話がある。小孃は學校話を又繰返す。主人は外であつた事を話される。中々興は盡きぬが、「お湯がわきました」と云ふので、つぎ〳〵に湯沐があつて、それから晩餐となる。

食事は誠に平等的で、一の方形の食卓を圍んで、行儀正しく、而も愉快げに、主人も下婢も皆同時に同じ物を食するのである。親しき間柄の來客は、大抵この樂しき團欒に加はつて、饗應を受くるのが例てある。酒は多く用ゐられぬので、小さ盃に二三杯で陶然となる。

斯かる樂しき中に晩餐を終りて、跡はランプを中心として團欒の花が咲く。新聞紙が廣げられる、雜誌が開かれる、色々の話が出る、唱歌が始まる。無論、下婢も跡仕舞が濟んだら此樂みに與る事が出來る、來客も大概は此樂みを分たるゝの榮を得るのである。

限りなき興も一段落つきかけると、小孃は眠くなる。「お先に失禮します」と云つて先づ席を退く。それから順々に皆又樂しき明日を迎ふべく眠に就く。

以上は平日の有樣であるが、日曜には近處の子供が茶のお稽古に來るので、夫人と大孃とは殆んど半日を是れに過ごされる。其間に主人は來客の應接やら、文書の檢閱やら、讀書などをして置かれて、餘る半日は打揃うて、郊外散步とか、水入らずの和歌會とか云ふ樣な樂みがある。春の花に、秋の月に、皆一樣に、公平に快樂を分たれて居る。

吾輩は素より粗野禮にならはぬ一寒生に過ぎぬが、何の幸福か知遇を辱けなうし、‥此美しき家庭に依りて、常に一道の光明、一脈の慰籍を得て居たのである。然るに、この美しき一家は先頃南の方へ歸られたので、吾輩は非常に悲しんで、落膽して居るのである。每日其邸の門外を通る度に、靴音を聞いて吠ゆるブチ（犬だけは殘されて居る）の聲のみは聞ゆるが、美しい笑顏はモー決して其窓に見えぬのである。

加藤邸晩餐會の記

加藤時次郎

堺　利彦様

拜啓來る十九日午後正六時半弊宅に於て理想上の先盟諸氏を招聘し御高話を拜聽仕り度折角の希望に付御都合上御差支無之限り御光來の上御談話被成下候はゞ誠に大慶に存候尤も食事は理想に背かぬ手前料理もの一二品だけ用意仕るべく候まゝ是亦御含み被下度候

二白案内狀は左の諸氏に向け差出し候間御來會の有無は來る十七日迄に御一報相煩し度候

佐治　實然君　阿部　磯雄君　山縣五十雄君
黒岩　周六君　田川大吉郎君　幸徳傳次郎君
内村　鑑三君　斯波　貞吉君　片山　潜君

予は右の招待に依り、十九日仝刻、新橋出雲橋際なる加藤君の邸に赴いた。加藤君の邸は病院と住居とを兼ねたもので、和洋折衷の作である。予は玄關から直に奥の西洋間に通された。それは二十疊敷もあらうかと思はれる一室で、中央に食卓があつて、食卓の眞上に電氣燈がともされて居る。來客は佐治、田川、黒岩、斯波、山縣の諸君で、阿部、内村の二君は不參の由であつた。一同は程なく食卓に着いた。加藤夫人も着席せられた。加藤君はやがて其謂はゆる手料理を說明せられた。料理は何やら肉の蒸したのにアスパラガス（野菜）を添へた者が一皿、ハムの黄瓜もみとも云ひそうな者が一鉢、それから鷄のはいつた五目飯の折詰が一つ、是等を主なる者として、スープのお茶碗が一つ、夏蜜柑と櫻の實とのお壺が一つ、其外には食卓の中央二個所に、龍眼肉の籠とクリームケーキ（西洋菓子）の鉢とが置いてある。加藤君の言葉に依れば、總べて是れ手の掛からぬ事を主としたもので、五目飯の折詰などは殊に意匠を凝されたものらしく思はれた。それから酒は一切なくて、炭酸水が注ぎわたされた。如何にも整頓したる食卓、如何にも淡白なる食事、少しの混雜もなく、少しの厭味もなく、主客相和して云ふべからざる趣味を生じた。少し後れて片山、幸德の二君も見えた。

食事をはつて、一同は廊下を隔てたる一室に導かれた。こゝは疊の敷かれた和三洋七の室で、椅子テーブルの備もあれば、和歌を書いた大幅の軸も掛かつて居る。チヨツト其軸の事を書きたくなつたが、其筆者は佐久間種といふ歌人で、歌にも字にも豪放磊落な所があつて、其歌は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

猿の叫びし聲に目さむれば庵の枕に月ふけにけり

と云ふのである。予の家にも今現に此人の歌の軸が掛けられてある。予の家のは

八十と云ふあたまの年は負ひぬれど猶重荷とは思はざりけり

と云ふのである。予は常に其歌と書体とに現はれたる意氣に敬服して居るのである。種先生も、加藤君も、予も、同じく豊前の生れである。

それから加藤君は次の室に門下の青年を呼びつどへて、扨我々に何か銘々話をして聞かせて呉れと云ふ事である。先づ起たれたのは山縣君で、腹を立てぬ事についての修養實驗談をやられた。次は佐治君で、かたづけ博士と綽名せられる程のお方とて、諸事整頓のお話があつた。次は黒岩君で、昨夜小説を讀んで感じた事のお話があつて、それで私も佐治君の整頓宗に歸依すると結ばれた。次は予で、予は加藤君と同郷たる因縁に依り、仝郷の後進と先輩との關係についてツマラヌ事を少し話した。次は田川君で、友人の交換と云ふ事を話された。友人の交換とは、例へば加藤君と黒岩君とが友人であるとして、加藤君が何かの折に多くの友人を招いて、其れに黒岩君を紹介する、又黒岩君も何かの折に其れと同じ事をやる、そうすると互に友人の交換が出來て甚だ善いと云はれるのである。次は片山君で、アメリカで苦學せられた事などのお話があつて、何でも人は困難に會つて、それを凌いだら樂をしようと云ふ樣ではイケヌ、一つ困難を凌いだら更に他の困難に向ふ勇氣を起す樣にして、常に逆境を樂む覺悟が無ければダメだと語られた。最後は幸徳君で、私のスキなは察しの善い人、即ち思ひやりの善い人で、私のキラヒなはミエ坊即ちハイカラであると話された。

それから加藤君の一身上についての懺悔話があつて、今後お互ひに一層交情を深くしたいと言葉をつがつて、夜もモウ更けて十時と云ふので、皆おひ〳〵に退散した。

此樣な清い會合は實に望ましき事で、何も必ずしも加藤君のゝ如き大きなる邸宅でなくても出來る筈である。只此上に望ましきは、少し婦人を其席に加へる事である。

倫敦雜話（一）

停愛氏

是れは倫敦に居る我儕の友人が、態々家庭雜誌の爲に書いて送つてくれたものであります。微々たる家庭雜誌が倫敦に社友を有して居る事は、大いに我儕の誇とする所であります。

▲自働料理店

近頃不思議なものが世に現はれて來たので、料理店の給仕は將來其職を失ふ事となるかも知れぬ。假令急に職を失ふ迄には至らずとも、給仕社會に恐慌を惹起すのは、恐らく餘り遠い事ではあるまい。此の競爭者は話もせねば理屈も云はず、目禮もせねば、祝儀を貰ひたい顔付もせぬ、髯もなければ、衣服の胸を廣くあけて白シャツを見せても居ぬ。それに躰裁が小奇麗て、應對が丁寧て、今迄の給仕には眞似も出來ぬほど働くが、勤務時間短縮の仝盟運動に加はる樣な事は決して無い。これが即ち近頃世に現はれた自働料理店と云ふ不思議なものである。原名はオートマチック、エーターと云つて、直譯すれば自働給仕と云ふ事である。

倫敦のチャーリング、クロス街に近きテームス河畔の公園に行けば、日曜と云はず平日と云はず、此の器械が毎日働いて居て、金さへあれば、一言も費さずに、音樂を聞きながら、晝飯でも、午後のおやつの茶菓子でも、心の儘に出來る樣になつて居る。

此自働料理店は風雅な瑞西風の亭で、費用は二万圓だと云ふ事である。一昨年の八月から倫敦府の公園課長の手で開業されたものであるが、實に驚くべき發明と云ふべしだ。先づ其店の前面は硝子張になつて居て、其中には幾列にも仕切られた奇麗な棚があつて、其棚に種々の食品の恰好よく並べてあるのが悉く見えすいて居る。それで客人は望みの食品の側にある小さな穴に定めの代金を投ずれば、直に其品がズーッと獨り手におりて來る。例へば、六ペンスの銀貨を一つ入れる時には、ビフテキの皿が忽ち目の前に現はれる。一ペニーの銅貨を一つ入れる時には、捩パンの一切が直にコロリと落ちて來る。そこで客人はそれを取つて、側にあるテーブルの上に持つて行つて勝手に食べる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何か飲みたいと思へば、茶、チヨコレート、コヽア、ジンジア、麥酒、レモン、炭酸水、何でもある。是れも例の通り銅貨を入れゝば直に出て來る。

此自働給仕さん何事もよく御存じて、ごまかしは到底駄目だ。贋金は直に突戻されるし、又不足の錢でおしつけ様としても、どうしても云ふ事をきかぬ。啞で、聾で、冷淡な一こくもので、一ペニーの銅貨で豚肉のサンドキッチを請求しても、もう一ペニー足して二ペニーやる迄はどうしても渡さぬ。ビスケット其他の菓子、菓物、アイスクリーム、乾酪等、皆正當な手續をする迄は決して持つて來ぬ。それに茶などの出し方は中々旨く出來て居る。棚に盆があつて、其盆には小量の茶の入つた茶碗と、牛乳の入つた小さな器と、それに角砂糖とが載つて居る。そこで客は穴の中に三ペニー投げ込んで其盆を受取り、別にそこにある管を捻つて其茶碗の中に湯を入れるのだが、此湯だけはロハである。モット廉く茶の買へる方法もある。それはコップを請取つて、一ペニー渡して熱い茶の出る管の口を捻れは宜いのである。

此自働料理店は開業以來大當で、時としては一日に

七百五十人の客のある事がある。最も繁昌するのは日曜日で、カステラだけでも二百五十も賣れると云ふ事である。處で感心なのは英國人の公德の發達して居る事で、コップ、皿、庖丁、肉叉、匕などが、只の一ッも盜まれた事は無いさうである。

エリントン兵營にも一つ自働器械が備へつけてあるが、これは麥酒だけで、外には何にも無い。併し兵士連には大受で一日二百圓の賣上がある。追ては市中にも之を備へ付けてキスキーを賣出すさうだ。

アールスコート遊覽所にある自働器械は一季節に二万圓の收入、一日六百圓の賣上を見た事がある。兎に角、此器械の長所は其仕事の早い所にあるので、此遊覽所で平均一時間に四百人前の茶を出したさうだ。又ロード、クリッケット、グラウンドに備へ付けの器械では、數分間に百六七十のサンドキッチを賣つたと云ふ話である。

此自働料理店は將來ます／＼世に用ゐられて、勤め人は毎日出勤の途中、乘合馬車の中で、豕肉と燒卵と燒パンとで朝飯をすまし、晝飯も又町の眞中でやるようになるであらうが、何しろ時間の經濟には此上なしと云ふ便利な物である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭文庫

▲我子秀雄　我輩は我輩の亡兒不二彦の紀念として編輯したる本號において、特に此「我子秀雄」を紹介する事を喜ぶ者である。秀雄と云ふは我輩の友人田川大吉郎君の夫人の弟で、僅に十四歳で此世を去られたのである。それて其一家の嘆きは一方でなく、終に此書を作つて責めてもの慰めとせられたのである。此書の大部分は母君の「涙の日記」で、卷頭には秀雄君の寫眞、仝君の書かれた寫生畫數葉、及び仝君より姉上達に送られた手紙、それから諸名家の仝情の文字などがあつて、又卷尾には、仝君の父君、姉上、妹御などの追懷の文字がある。又此書の全體は善き紙の石版摺で、其版下は秀雄君の姉上(菊野)の筆に成り、父上(松井昇氏)の畵も亦多く挿まれてある。斯くて此書は極めて美しく床しき小冊子となつて、永く秀雄君の紀念として松井家及び其親戚朋友の家に殘るであらう。我輩の家庭文庫にも其一冊を留むるの榮を得たのは、我輩の

深く謝する所である。「涙の日記」の中なる母君の歌少し左に記す。

やめる子がつみてはさみし白菊の花はかをりぬバイブルの中に
近づきし春の光よ願はくばやめる子の上に光あらせたまへ
木がらしの柿ふきまく夕やみに神にねぎごと繰りかへしつゝ
うちゑみし昨日のおもわ其まゝに寢たる姿よなつかしきかな
世にありし昔のくさ〴〵夜もすがら語りつ泣きつ泣きつ語りつ
皆人も泣くらん如く思はれて年あくるとはおもほえぬかな
見まじとて納めおきたる寫し繪を又とりいでゝ泣く夕かな
答ふべき人は此世に無きものを門に名を呼ぶ友どちの聲
長き〳〵冬の長夜の夜もすがら泣きあかしても猶つきぬかな
皆人のなぐさめたまふ玉づさを見るにつけても散る涙かな
我病くるしからずとほゝゑみて母なぐさめし夜半もありしを
いつも來て遊ぶ子どもの其中に靈もまじりてあそぶなるらん
なき人の使ひなれたる文机のもとの處にあるが悲しさ
なき吾子の手箱のすみに殘りたる貝のいろ〳〵なつかしきかな
人の子も我が子も同じ神の子よ入りて行きませ我が傘の中に
數ふれば早や百日にもなりにけり泣きて過すよ長き春日を、
うせし子のねぶりはさめず奥つきのかなめの垣根若葉しげりぬ
ものたらぬ心地のみして滊車の中に子供の數をよむが悲しさ
けふもまた同じ濱邊にあひにけり我子に似たる都をのこよ
床の上にかけし墨畫の面影は我が子ながらも貴かりけり

▲食道樂（村井弦齋著）　此事については第二號にも書いておいた。小説としても無氣邪で面白く、料理法の講

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

義としては實に此上も無いもので、其外家政學の講義として聞くべき所も甚だ多い。今も猶報知新聞に連載せられて居るが、今度春の巻だけか奇麗な本にして發行せられた。委しくは廣告を御覧あれ。

▲應用理科家政心得草（河西璞著）是れは山路愛山氏の獨立評論社から發行せられる婦女文庫の第一編で、應用理科と云ふ所が特色である。

「豆は一種特別の穀類で、特に我國に取つては、正一位、功一級を與へらるべき大勳績のある食料でございます、……我々の身體には……蛋白質が入用ですが、欽明天皇以來、佛教の間違つた肉食禁制主義が漸く行はれて……つまり多くの人民は止むなく精進八分の生活をせねばならないとに干渉されましたが、此時に當つて豆と云ふ自然の救世主は、大慈悲心を振起して、此大厄難から一切衆生を救ひ出して呉れました、即ち我國民は日用蛋白質の大部分を、大豆、小豆、豌豆などの豆類から得た譯で、特に大豆は全重量百の中三十六の蛋白質と十七の脂肪とを以て、美事肉類の不足を補ひました……味噌に、醤油に、湯葉に、豆腐に、納豆に、きんとんに、煮豆に、其料理法は穀類中最も豐富でございませう、今後とも丈夫な胃腸を持つて居る人は、大いに豆類を用ふべきでございます」（四六版二一四頁）

△女子の天國（池田常太郎著）婦人の修身齊家に關する講話百餘個條を集めたもので、さすが時事新報記者の著であるだけに、福澤先生の新女大學の主意を奉じて、深くは無けれど、廣く行きわたつて、頗る穩健な文字である。（菊版一八六頁）

△娘節用（富山房名著文庫第四）是れは有名な「小三金五郎」の話である。總て昔の人情本と云つた者は、とかく卑猥な事が多くて家庭の讀本とするに足らぬが、此娘節用だけは（藝妓、娼妓を主人公とはしながらも）誠に美しく善く出來た話で、我輩などは讀むたびに涙を浮べる事である。「他の謂はゆる人情本なる者の濫に艶にして褻れたると、架を同じうすべきにあらず、予の校訂の勞を取りて、名著文庫の中に收むるの意は、茲に在りとす」と紅葉山人の云つたのは全く尤もの言葉である。（並製廿錢、上製廿八錢）

△狂言全集　日本の滑稽文學として一種特別の光彩を放つものは狂言である。家庭の讀物として、此くらゐ無邪氣な、此くらゐ面白い者は、迚も外には無い。狂言を集めた本は色々あるであらうが、今度博文館から狂言全集の上卷が出た。

（第十七頁を見よ）（定價五十錢、横綴三五六頁）

●匆々一筆

▲古嶋安二君　より「足下は此頃犬を飼つて居るようであるが、曾て萬朝報の紙上に飼犬廢止論を書いたのは足下では無かつたか」と云ふ攻撃を受けました。如何にも小生は曾て飼犬廢止論と云ふものを書いた事があります。然し、これは番犬として、門を守らせる、夜を守らせると云ふ目的の飼犬を指したので、議論を强くする爲に少し言葉を極端に走らせた迄の事であります。「言文一致普通文」の中にも「飼犬禁止についての請願」と云ふ一文があります。し、「我家の犬猫」の中にも小生が人を吠えた犬を折檻した記事がありますから、若しおついでに其れらを御讀み下さるならば、小生の本意は明かになるであらうと考へます。

▲敬愛生　と申さるゝ方より、宗教雜誌としては何と云ふのが善いかと云ふ御質問がありました。小生の見る所では、基督教では内村鑑三君の「聖書の研究」、海老名彈正君の「新人」。佛教では「精神界」、「新佛教」。新佛教」は佛教の新派で、一切の歴史を棄てゝ、只佛教の根本義たる汎神論を唱へると云つて居ります。「精神界」は眞宗他力の信仰に新しき光を加へて居ります。其外にはユニテリアン協會の六合雜誌、これも善い雜誌であります。

▲或友人　より、文學雜誌では何が善いかと問はれました。小生の見る所では、餘り善い者は無いと思ひます。小生のスキから云へば、故正岡子規氏の一派の手に成る「ホトヽギス」を第一に推薦致したい。然し、是れは主として俳諧の事を書いて居るので、其趣味の無い人にはお勤めも致しかねる。其外には「文藝倶樂部」の俗惡、「文藝界」の無味、止むなくんば「新小說」を取るより外は無い。和歌の雜誌としては「こゝろの華」などが善いかと思ひます。是れは佐々木信綱氏の一派の手に成る者であります。

▲田内安太郎君　より「社會主義の內容を平易に說」いて呉れぬかとの御注文がありました。是れは方々より御注文もある事ゆゑ、今後の紙上に書く積りであります。

▲市川好平君　より音樂の事について御相談がありましたが、小生は一向其心得が無いので何とも御答を致しかねます。然し家庭に音樂の必要なるは申す迄も無い事で、今日で音樂と申せば、先づオルガンが普通でありましよう。少し餘裕のある家では小いオルガンを一臺備へつけて貰ひたいと小生は思ひます。

▲西村義道君（岐阜縣御嵩町警察署長）　より、第三號「隅田川過の好家庭」の主人たる佐々熊太郎氏夫婦の事について、長文の記事を送り越され、つぶさに其美德を報ぜられましたが、本號には掲載の餘地を得ませぬので、此に謹んで謝意を表しておきます。

▲佐々熊太郎氏　よりの葉書に、「お書き下さるならば其積りにて多少のお話も致すべき筈なりしに……今更遺憾にして且つ世間に愧づる所多し」との御謙辭がありまして、其末に「ほめられて行儀なほすや、いたづら子」と云ふ俳句が一つありましたが、小生自ら思ふに、小生の如きは「言葉だけ人眞似をする鸚鵡かな」とでも申しましょうか。お耻かしき次第であります。

●●●●●

▲前號正誤　「結婚離婚の統計」の中、十二行目、三十歲は廿歲の誤。

▲堺宛の郵便物　は東京市四谷角筈七三八と御記しを願ひます。

▲小林助市轉居　京橋區新港町一丁目十七番地へ。

▲本社移轉　京橋區新港町一丁目十七番地へ。

村井弦齋著

増補註釋 食道樂 春の巻

（家庭第一實用の書）

▲口畫大隈伯爵家臺所の眞景▼　▲實用向堅牢製本▲正價八十錢▲郵税十錢

弦齋居士の小説食道樂は天下に鳴り渡れり、衛生上より和漢洋の料理を説明し、一々詳細に其料理法を掲ぐ、然れども小説以外に語るべきもの多し、此に於て大に增註を施し完璧となしぬ▲增註の內容は

本文料理法の解釋▲本文以外の新料理法▲本文中に在る器物の圖畫▲各食品の滋養分說明▲博士ケルネル氏の算出したる日本人一日の食物表▲各食品の鑑定法▲各種病人の食物及其禁忌▲食物の中毒症狀及其應急治療法▲食品各物等の販賣所及び價格等有益の事項凡そ**一百五十餘**▲附錄には日用食品**四百四十餘種**の分拆表及大隈伯爵家臺所の說明あり

此書一冊を購ふは**鷄一羽を買ふよりも廉なり**、而して家庭百年の寶となる、苟も生命を重んずる人は必ず一本を臺所に備ふべし

●**發行所**　東京京橋區三十間堀三丁目　**報知社出版部**

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山縣五十雄譯註

英文學研究

全六册完成　定價金壹圓　郵税拾錢

○第五册＝ヂッケンス原著　婿選び
○第六册＝トウエーン原著　該撒殺害

帝國文學曰く山縣君が此種の譯註に巧妙熟練なるは既に江湖の認むる所吾人の贅する要なけん小六ケしき原文を何の苦もなくやッてのけられたる所感服に堪へず註釋は明確に精細なり英文學獨修者には好個の手引草なり

寒川鼠骨新著

寫生文

再版　定價四拾錢　郵税四錢

東京朝日新聞評して曰く其文章の輕妙にして其趣味の饒多なる人をして百讀手を釋くこと能はざらしむ避暑旅行に出掛くる人は必ず一本を購求して旅中の好侶伴とすべきなりと云々

新刊圖書

英國殖民大臣　チェンバーレン　定價貳拾錢　郵税貳錢

明治畸人傳　定價廿五錢　郵税貳錢

新撰組長　近藤勇　定價廿五錢　郵税貳錢

明治新俳句集　定價廿五錢　郵税四錢

家庭の友

定價一册五錢　見本郵券六錢

一ヶ年拾貳册郵税共六拾錢

七月三日第四號目次　初號より取揃へ註文に應ず

○禁酒美談
十八年間の苦心遂に良人をして禁酒せしめたる某夫人の實話

○家族的旅行の工夫
▲新渡戸稲造氏　▲鎌田榮吉氏
▲柳澤保惠伯　▲矢島楫子氏
▲志賀重昂氏

○育兒問答　醫學博士　弘田長

○家政問答　嘉悅孝子

△家庭幼稚園の話△我家の家計簿

△新案婦人服△小兒西洋服仕立方

○子守唄　樂譜附　平木白星

○家庭料理　村井弦齋氏家庭の献立表

△臺所道具一覽△家庭顧問△讀書案內△蚤の話△睦しき家庭△外數項

尋常小學校程度の讀み物

こども

毎編一册金五錢郵税貳錢

第一編　福麻呂が世界見物の話
第二編　蟲合戰
（以上七月五日發賣）
第三編　小供鑑
第四編　とりかえッこ物語
（以上七月廿日發賣）
第五編　猿の話
第六編　頓智奇談
第七編　可笑しき話
號外　考へ物づくし

●全部拾册郵税共前金六拾錢

出版元　東京神田區南甲賀町八番地　內外出版協會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊消夏の讀物

池田秋旻著

女子の王國

定價四十錢　郵稅六錢

婦人の任務　議論は穩健
實力の養成　說明は親切
女權の擴張　文章は平易
家庭の改良　趣味は豐富

發行所　東京麻布竹谷町一　南風社

大賣捌　東京神田表神保町　東京堂

社會主義

月二回發行　一部郵稅共七錢

六月十八日發行第七年第十四號の要目左の如し

本誌前號の發賣禁止に就て▲犬と人間▲近時何ぞ上流者に氣違の多き▲貴婦人と猫（以上記者）▲噫可憐絕望の名士！（逸民生）▲職業論（西川生）▲道德の罪惡と生活問題（尾池狂氏）▲學生に對する忠告（農學博士新渡邊稻造）▲社會殖民事業の卒先者（白熊生）▲北米日本勞働者の有望（片山潜）▲名著綱要（記者）▲社會主義小樂園

都市社會主義

定價廿五錢　郵稅四錢

我東京市を如何にすべき乎、市制の改良、市制と政黨、市民の負擔、都市の經濟、土木事業、交通機關、衞生、公園、水道、下水、教育、市場、築港問題等を詳說したるものにして、好評嘖々、市政に志ある者是非一讀すべし、著者は片山潜氏！。

富の壓制

定價十二錢　郵稅二錢

社會の組織、階級爭鬪、社會主義は何人にも必要なり、怠惰の福音、滿腹論等に就き、大膽なる言論を爲したるものにして、世評區々、或は奇矯に過ぐといひ、或は沈痛の書なりといひ、或は悲憤慷慨の書といひ、或は氣焰の結晶なりといひ、又或は熱罵の奥に眞實あり、冷笑の底に涙痕ある書なりといふ、富の壓制に苦しめるもの一讀すべし。

申込は東京神田三崎町三ノ一**社會主義**圖書部へ宛てらるべし。

(家庭雜誌第四號)　明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　(毎月一回二日發行)

新佛教徒同志會編輯

將來之宗教

現代名士三十餘家肖像筆跡入

定價七十錢◉郵稅十錢

我徒は獨斷を排斥す乃汎く現代の名士三十餘家を訪ひその將來の宗教に關する意見を叩いて玆に此の書を公にす

釋雲照氏
清澤滿之氏
坪內雄藏氏
澤柳政太郎氏
加藤弘之氏
片山國嘉氏
佐治實然氏
江原素六氏
釋宗演氏
小崎弘道氏
島地默雷氏

元良勇次郎氏
海老名彈正氏
前田慧雲氏
島田三郎氏
大道長安氏
井上圓了氏
巖本善治氏
內村鑑三氏
中島力造氏
黑田眞洞氏
植村正久氏

大內青巒氏
南條文雄氏
渡邊南隱氏
河合清丸氏
井上哲次郎氏
村上專精氏
德富猪一郎氏
田中智學氏
浮田和民氏
本多庸一氏
附錄訪問餘談

我徒は自由を尊重す乃強ひて同一典型の下に人を律するに忍びず敢て各種の信仰を開展し普く大方の撰擇に任ず

發行所　東京駒込小石川原町三番地　新佛教徒同志會出版部

發賣所◉東京駒込小石川原町三　鷄聲堂◉東京本郷四丁目五　文明堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA